

大丈夫

南アルプス市 井上勝六

「大丈夫ですか?」「大丈夫です」。

これがKさんとの最後の会話だった。前夜、往診宅のKさんの血圧は低く、呼吸や脈の弱さからも「その時」の近いことが窺われた。

「苦痛の訴えが無いのが何よりですね」。

夫人に語りかけていると、傾眠状態だったKさんはうっすらと目を開け、冒頭の質問をされたのだった。不意な言葉に私は一瞬とまどったが、とっさに口をついて出たのが「大丈夫です」だった。何が大丈夫なのか? 何の根拠もなく、場当たりの・独断で口から出た言葉だったが、「生きているから大丈夫」なのか、あるいは「うまく逝けるから大丈夫」なのか……。Kさんは果たしてどのように思われたか、あれこれ繰り返し考えながらの帰路だったが、他に適切な言葉があったとも思えなかった。翌朝、静かに81歳の生涯を終えたKさんが不安なく安楽に逝かれたとすれば、ただ寄り添っただけのその言葉はそれでよかったのかもしれない。

医師でもある作家・南木佳士さんのエッセイに、「ひとはだれかの認証を得ないと生きている実感を失うらしい」と、ある往診体験談が記されていた。寝たきりでほとんどしゃべらない超高齢者の診察を終えたとき、その老婆に「生きてるかい?」と問われた往診医は、「大丈夫、生きていますよ」と答えたというのである。

探検家で医師でもある関野吉晴さんによると、ブラジルの熱帯林に住む先住民の「こんにちは」のあいさつは「アイニヨビ」、意味は「存在するか」とのこと。厳しい自然環境の中では明日の命の保証は低だろうから、今あること感覚は私たち文明国人よりはるかに高いにちがいない。相手の

存在を確認しつつ自分の存在も確認する、それが人と接する原点の挨拶になっているのは、命の儚さと大切さをいつも実感しているからだろう。

乳飲み子が空腹やオシメなど物理的要求以外で泣くのは、か弱き命への不安感がつるからではといわれる。霊長類学者の山極寿一さんによると、いつも母親の腕の中にいるゴリラやチンパンジー、サルなどの赤ちゃんがとてもおとなしいのは、ヒョウなど外敵に存在を察知されないようにして身を守るためだという。ゴリラの五倍もの体脂肪率で生まれてくるヒトの赤ちゃんは重く、母親は抱き続けることができないし、また赤ちゃんは毛のない母親につかまっていられない。物理的に母親は手放さざるを得なく、離された赤ちゃんの不安は昂じ、けたたましく泣いて母親の関心を引こうとする。「大丈夫、安心して」と、母親に抱き締められ、顔を見つめられ、語りかけられて泣きやむのは、存在の全てが受け入れられ安心感に包まれるからだろう。

ところで、ひとの命の安全には質的な環境は必要条件だが、それが保証されなくなった終末期にはどうあればよいのか。仏教でいう安心(あんじん)とは、何かの「安全」によって得られる安心(あんしん)ではなく、心の内の執着が消え安らいだ状態とのこと。でも、「心頭滅却すれば火もまた涼し」というような解脱の心境にはだれもがなれるわけではあるまい。

自力が無理なら他力に頼るしかないが、恐らく誰もが日常に気軽に使っている「大丈夫」、調べてみたら真意は「同胞から不利益と苦しみをなくそうと望んで修行する菩薩」とのこと。「……東に病気の子供があれば行って看病してやり、……